

昭和四十一年八月十日 第一刷発行

NDC 933

リチャード＝アトウォーター

フローレンス＝アトウォーター

ポッパーさんのペンギン

新しい世界の童話シリーズ・14

訳者の了解により検印廃止



訳者■光吉夏弥◎

発行人■古岡秀人

編集人■石井和夫

本文印刷■信毎書籍印刷株式会社

オフセット印刷■株式会社恒陽社印刷所

製本■株式会社国宝社

発行所■株式会社学習研究社

東京都大田区上池上264

振替東京142930

学研品名番号24314

落丁・乱丁本はおとりかえいたします。

定価 四〇〇円

ポッパーさんのペンギン

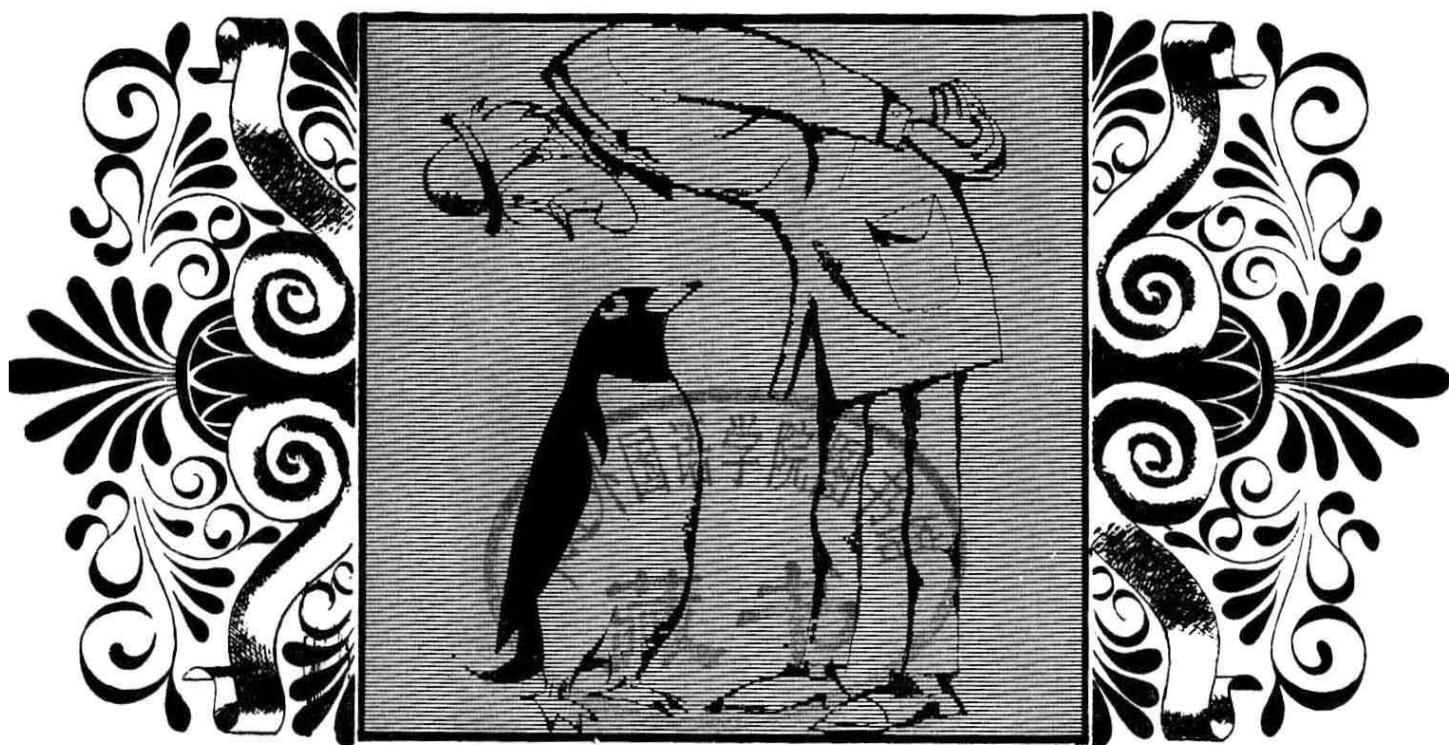
チャード＝アトウォーター作

ハーレンス＝アトウォーター作

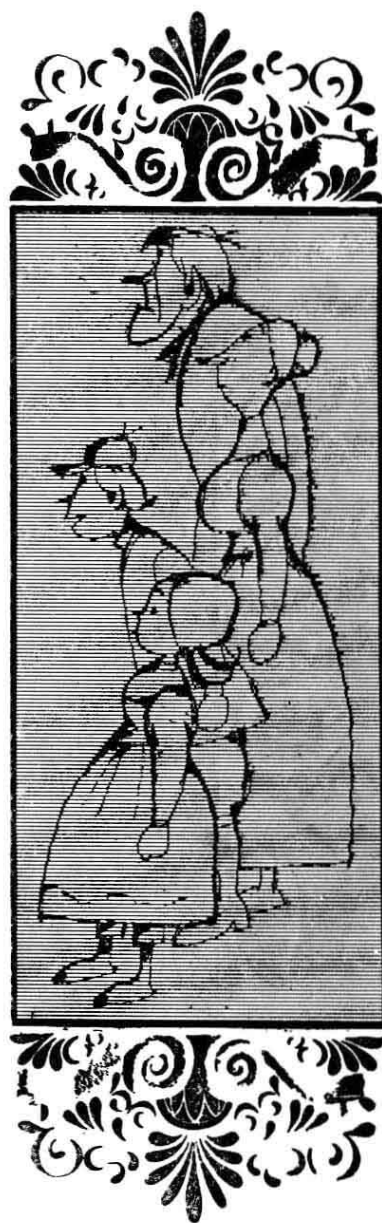
光吉夏弥訳

若菜 珪画

Mr. POPPER'S PENGUINS



Mr. Popper's Penguins



ポッパーさんのペンギン もくじ

ペンギンさわぎ	42	121	ポッパー一座のペンギン・サーカス
キャプテン・クック	32	113	グリーンバウムさん
はるばる南極 なんきょく から	22	107	お金のしんぱい かね
ラジオの声 こえ	13	99	あかちゃんペンギン
スチルウォーター	5	90	グレタ

キャプテン・クック、すをつくる
 さわぎのつづき
 51

ペンギンのさんぽ
 60

さかすべり
 67

くらいかげ
 77

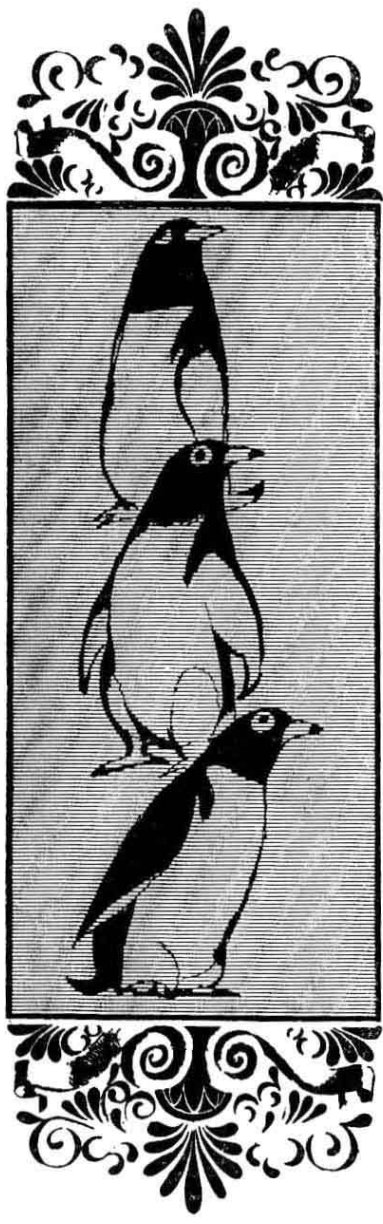
133
 旅^{たび}から旅^{たび}へ

143
 大^{だい}ひょうばん

153
 四^{がつ}月の風^{かぜ}

164
 ドレイク提^{ていとく}督

176
 さようなら、ポッパーさん



デザイン・江口 進

● 編集委員

<50音順>

青山学院大学講師
英米児童文学翻訳家

神宮輝夫

国立音楽大学教授
フランス児童文学翻訳家

塚原亮一

慶応義塾大学助教授
英米児童文学翻訳家

渡辺茂男

MR. POPPER'S PENGUINS

by Richard Atwater
and Florence Atwater

1938

Little, Brown and Company
Boston, U.S.A

● 訳者のご紹介

この本を訳された光吉夏弥先生は、1904年に佐賀県に生まれ、慶応義塾大学経済学部ご卒業後、毎日新聞社に入社、長い記者生活を経て、戦後、岩波書店の「子どもの本」等の創建に力をつくされ、主として英米児童文学の翻訳・研究・評論に従事しておられます。主な訳書は、「子どもの本」をはじめとして『世界をまわろう』『りこうなおきさき』（共に岩波書店刊）等があります。また、かたわら写真・舞踊の研究をすすめられ、その方面でもご活躍中です。



スチルウォーター

九月がつのすえの、ある午後ごごのことでした。

ペンキ屋やのポッパーさんは、しごとをおえて、スチルウォーターのちい小さな町まちの、気きもちのいい通りとおを、うちへかえるところでした。

バケツやは、しごとや板いたなどを、いっぱいもって、ポッパーさんは、ちよつとあるきにくそうでした。きものには、あちこちに、ペンキや塗料とりようのはねがついていますし、かみの毛けや、ほおひげには、かべ紙がみのきれはしがぶらさがっていました。どつちかというと、ポッパーさんは、あまり、きちんとしているほうではなかったのです。

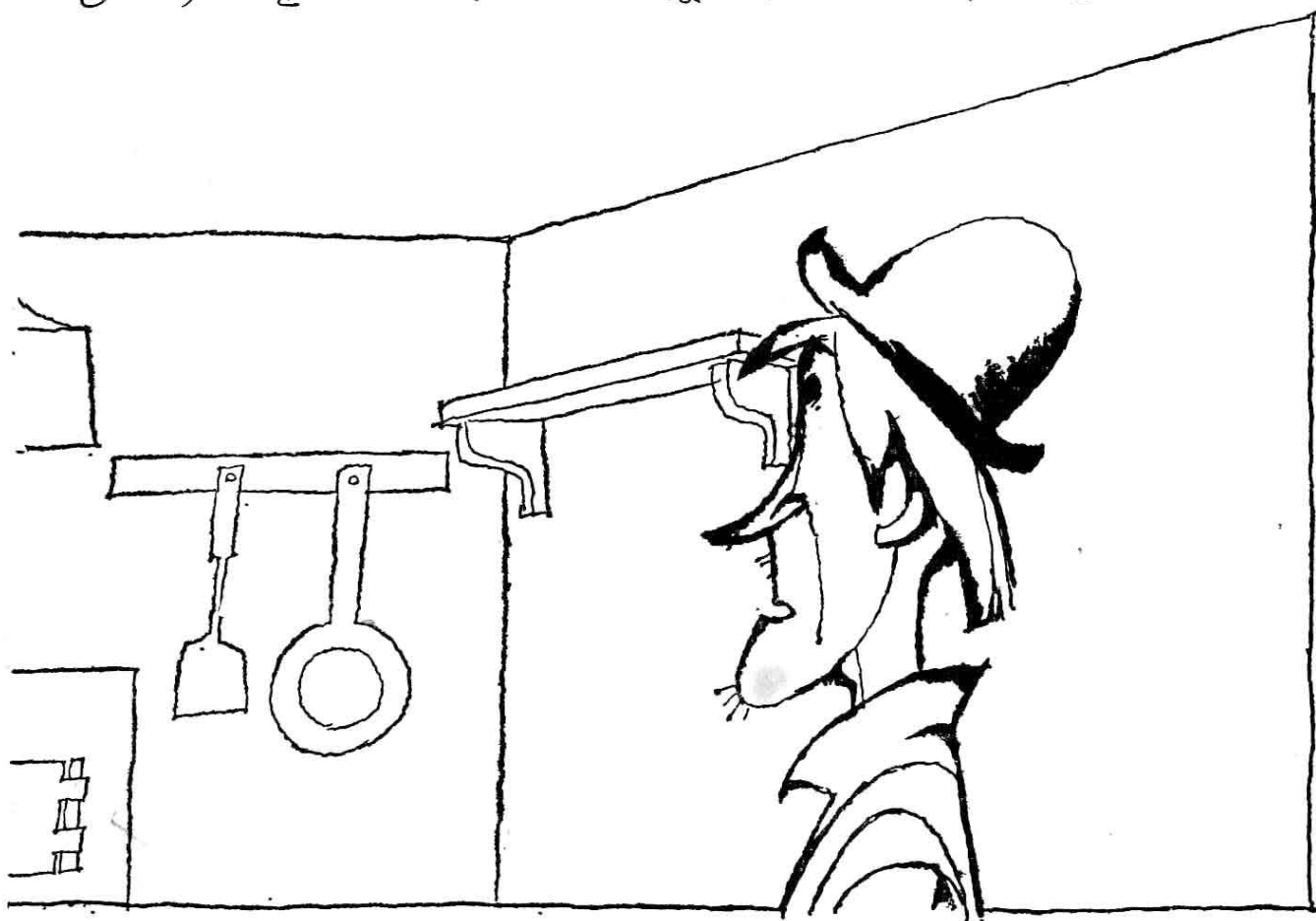
ポッパーさんがおると、子どもたちは、あそびをやめて、にこにこ、見あげました。そして、おくさんたちは、こういいました。

「あら、ポッパーさんがいくわ。うちも、春はるになったら、ペンキのぬりかえをしても

らうように、わすれずに主人^{しゅじん}に話^{はな}してお
かなくちゃ。」

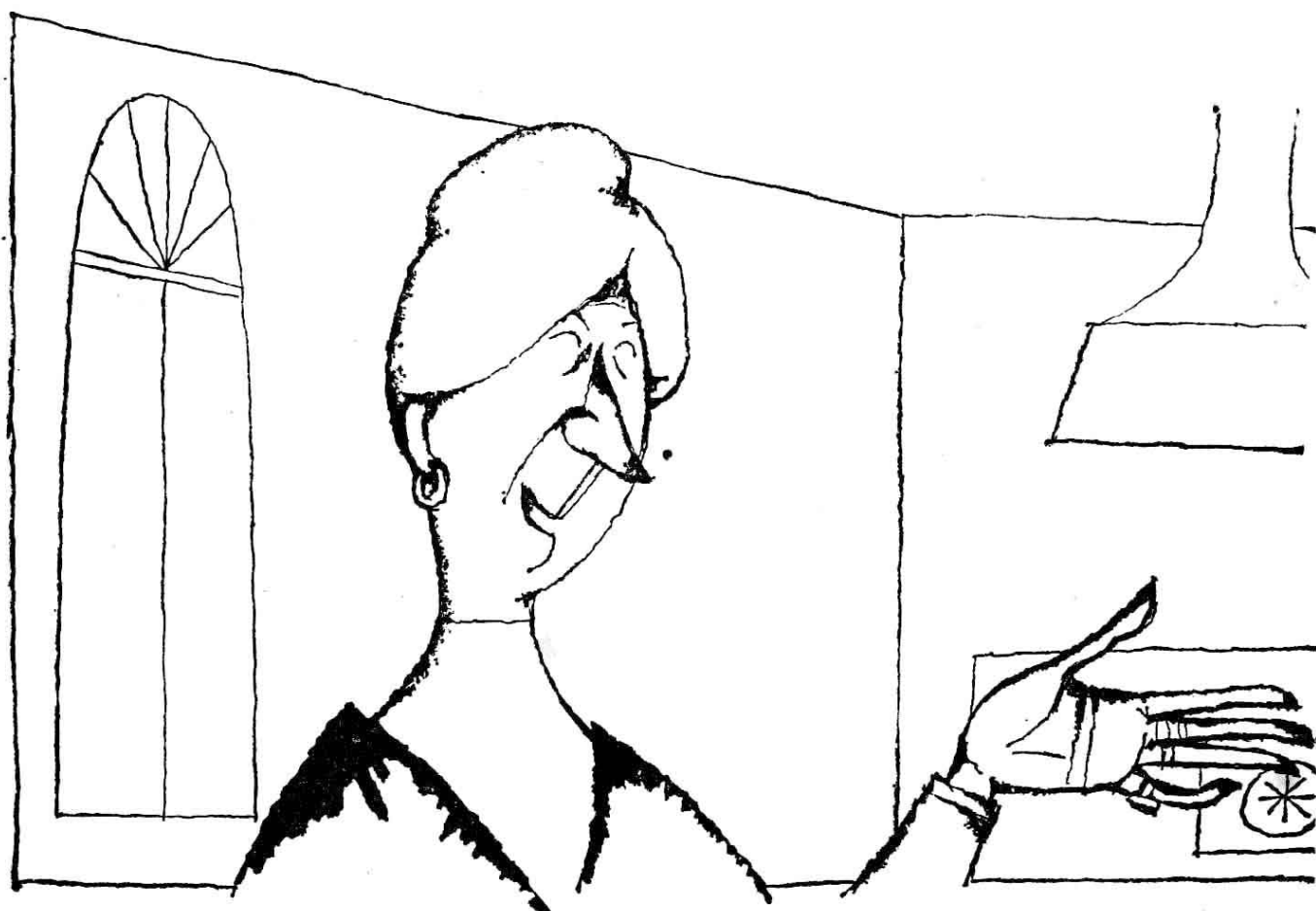
ポッパーさんが、あたまのなかで、ど
んなことをかんがえているのかは、だれ
にもわかりませんでした。まして、ポッ
パーさんが、そのうち、スチルウォータ
ーの、いちばんゆうめいな人^{ひと}になろうな
どとは、思^{おも}いもよりませんでした。

ポッパーさんは、いつも、ゆめみたい
なことばかり、かんがえていたのです。
よその家^{いえ}で、せっせと、かべ紙^{がみ}にのりを
ひいたり、外^{そと}まわりのペンキをぬったり
しているようなときでも、うっかり、じ



ぶんのしていることをわすれてしまうこと
とが、よくありました。一どなどは、台
所^{どころ}のかべの三ほうを、みどりいろにぬり、
のこりの一ほうを、黄^きいろにぬってしま
いました。

ところが、そこのおくさんは、おこつ
て、やりなおさせるかと思^{おも}いのほか、そ
れがとても気^きにいつて、そのままにさせ
ておきました。すると、ほかのおくさん
たちも、それを見^みて、すっかり気^きにいつ
てしまい、そんなわけで、まもなく、ス
チルウォーターじゅうの台所^{だいどころ}が、どこも
みな、二色^{しよく}ぬりの台所^{だいどころ}になってしまいま



した。

ポッパーさんが、それほどうっかりやだった、そのわけは、いつも、とおい国のことを、ゆめみていたからなのです。

ポッパーさんは、スチルウォーターの町から、一歩も出たことがありませんでした。といって、しあわせでなかったわけではありません。小さいながらに、こぎれいな、じぶんのうちもあれば、なかのいいおかみさんと、ジェイニーとビルという、ふたりの子どももいました。

それでも、やはり、ポッパーさんは、おかみさんとしりあって、うちをもつまえに、いくらかでも世界を見ておけたら、よかったろうにと思うことが、よくありました。

インドでトラ狩りをしたこともなければ、ヒマラヤの山やまにのぼったこともなく、南洋の海にもぐって真珠とりをしたこともありません。それに、なによりも、南極も北極も見ることがありません。

それが、ポッパーさんの、いちばんさんねんに思うことでした。雪と氷の、あのき

らきらした、はてしない白い世界を、まだ見たことがないのです。スチルウォーターのペンキ屋なんかでなく、科学者になっていたら、——そうすりゃ、大たんけん隊のどこかにくわわって、南極か北極へでかけていたかもしれないのにと、ポッパーさんは、いつも、そんなことばかりかんがえていたのです。

町に、南極や北極の映画がかかったときくと、いつもまっさきに、きつぷ売り場にかけつけるのは、ポッパーさんでした。おまけに三かいも、ぶっとおしに見ることが、よくありました。

町の図書館に、南極や北極のあたらしい本がはいったとなると、いつもきまって、ポッパーさんが、まっさきにかりだしました。

まったく、ポッパーさんは、南極や北極のたんけん家のことなら、じつによく読んでいて、その人たちの名まえは、ひとりのこらずあげることができましたし、めいめいが、どんなことをしたかまで、ちゃんとしていました。このことにかけては、たしかに、ポッパーさんは、ひとかどの大先生でした。

ポッパーさんにとっては、夜が、一日じゅうでいちばんたのしい時間でした。この時間になると、じぶんの小さなうちのいすに、こしをおろして、地球のてっぺんと、そこにある、これらのさむいところの話を、とつくりと読むことができます。また、読みながら、きよ年のクリスマスにジェイニーとビルがくれた小さな地球儀を手にとって、いま読んでいるところの、せいかくな場所をさがしあてるところもできました。

そんなわけで、いま、通りをかえっていきながらも、ポッパーさんは、たのしくてしかたがありませんでした。これで、きょう一日はすんだし、九月も、もうおしまいだったからです。

プラウドフット街四三二番地の、こぎれいな平家だての家のまえまでくると、ポッパーさんは、くるとまわって、門をはいりました。



「ねえ、おまえ。」と、ポッパーさんは、バケツやは、しごや板^{いた}をおろして、おかみさんにキスをして、いいました。「これで、ぬりかえや、はりかえの季節^{きせつ}はすんだ。スチルウォーターじゅうの台所^{だいどころ}は、みんなぬってしまったし、エルム街^{がい}のあたらしいアパートのへやも、みんな、かべ紙^{がみ}をはってしまったよ。また、春^{はる}になって、家^{いえ}のぬりかえをたのみにくるまで、もう、しごとはないわけさ。」

おかみさんは、ためいきをついて、いいました。

「あたしは、おまえさんのしごとが、春^{はる}から秋^{あき}までなんかでなくて、一年^{ねん}じゅうつづくようなものだったらしいのにと、ときどき、思^{おも}うんだがね。そりや、おまえさんが、しごとがやすみで、うちにいてくれるのは、ありがたいんだけど、大^{だい}の男^{おとこ}が、一日^{いちにち}じゆう、そこいらにすわりこんでいて、本^{ほん}ばかり読^よんでいるんじや、ちつとは、そうじのじやまにもなるからね。」

「うちのぬりかえか、はりかえでもしてやろうか。」

「けっこうだよ。」と、おかみさんは、きっぱりいいました。「きよ年^{ねん}は、おまえさん、

なんにもすることがないんで、ふろ場のペンキを四どもぬりかえたじゃないか。あれでたくさんだと思うよ。それよりも、あたしがしんぱいなのは、お金のことなのさ。そりゃ、ちっとは貯金だってあるし、これまでの冬のように、なんとかやっていけるとは思うよ。けども、もう、ローストビーフもなけりゃ、アイスクリームもなしだよ。日よう日にだって――」。

「じゃ、まい日、マメばかりなの？」と、あそびからかえってきたジェイニーとビルが、ききました。

「そんなところかもしれないね。」と、おかみさんはいいました。「とにかく、手をあらっておいで、ごはんだから。それから、パパは、このペンキのごたごたしたものをかたづけてちょうだい。もう、とうぶん、こんなものは、いりっこないんだろうからさ。」



ラジオの声こえ

その晩ばん、子どもたちをねかせてしまってから、ポッパーさんとおかみさんは、のうのと、しずかな秋あきの夜よながをすごしました。

プラウドフット街がい四三二番地ばんちの、このこぎれいな居間いまは、スチルウォーターじゅうのどこの居間いまとも、よくにいていましたが、ただ、『ナショナル・ジオグラフィック・マガジン』という地理ちりの雑誌ざっしからきりとった写真しゃしんが、かべのあちこちに、かかっていた。

おかみさんは、つくろいものを取りあげ、ポッパーさんは、パイプと本ほんと地球儀ちきゅうぎをもってきました。

ときどき、おかみさんは、これからさきのながい冬ふゆのことをかんがえて、かるいためいきをもらしました。冬ふゆじゅうつづくだけのマメが、ほんとにあったかどうかと、

思おもったのです。

ところが、ポッパーさんは、いっこうに、しんぱいなんかしていませんでした。めがねをかけながら、これから冬ふゆのうちいっぱい、しごとにもじゃまされずに、すきな旅行記りょこうきを讀よんでいられると思おもうと、もう、うれしくてたまりませんでした。

小ちいさな地球儀ちきゅうぎをそばにおいて、さっそく、讀よみはじめました。

「なにを讀よんでいるのさ。」と、おかみさんがききました。

「『南極なんきょくのぼうけん』って本ほんさ。とつてもおもしろいよ。これまで南極なんきょくへいったことのある、いろんな人ひとのことや、その人ひとたちが、そこで発見はっけんしたことが、なんでも書かいてあるんだ。」

「南極なんきょくのことばかり讀よんでいて、よくあきないね。」

「あきたりなんかするものか。そりや、本ほんなんかで讀よむより、よっぽど、じぶんでいってみたいと思おもうさ。けども、つぎにいちばんいいのは、やっぱり、讀よむことだよ。」



「そんなところへいったら、きつと、うんざりしちゃうだろうね。」と、おかみさんはいいました。「氷こおりと雪ゆきばかりで、とてもうつとうしくて、さむそうじゃないか。」

「いやいや。」と、ポッパーさんはいいました。「きょ年ねん、宝石座ほうせきざにかかったドレイクたんけん隊たいの映画えいがを、いっしょに見みにいていりや、うつとうしいなんて思おもわなかったろうがね。」

「そりや、そうだろうけれど、これから、映画えいがへいくお金かねなんか、うちにはないだろうと思おもうよ。」と、おかみさんは、